

表音速記法

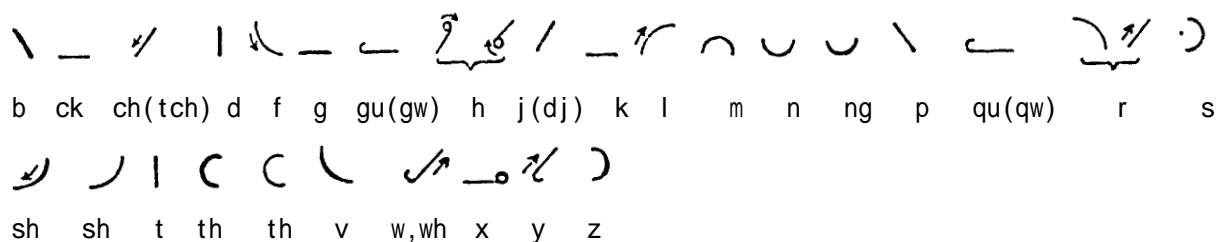
表音速記法の理論はジョン・ウィリス（1602年）によって初めて考案されて以来、徐々に発達してきたものである。アイザック・ピットマンは、先人たちの研究を総覧し、速記の歴史に一紀元を画する表音速記法を確立することに成功した。

表音速記法 *phonetic shorthand system* は、正書法に関係なく発音を**発音のとおり**に速記符号で音写する方式である。例えば knife は nif、may は ma のように。英語は43音で構成され、26の字母で表記される言語である。ピットマンは英語の音声学的分析に基づき、この43音に対応する表音符号として、28の子音字、12の母音字、4の二重母音字をつくり、さらにそれらの組合せ略符号、省略法などを体系的に整備した。

以下、ピットマン式の組織を概観してみよう。

第1図 子音符号

無声音・有声音の関係にある P・B、F・V、K・Gなどは同一符号の濃淡で区別している。



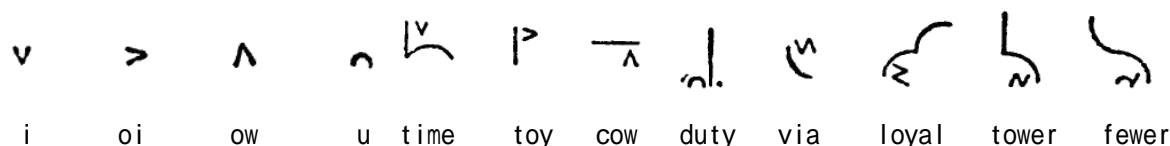
第2図 単母音

英語の12の単母音は、**点と短線の濃淡**であらわす。その位置はその母音が子音に先行するか、子音に続くか、また子音字が垂直線か斜線か、あるいは水平かという2つの要素によって定まる。

	上	中	下	上	中	下
短音	・	・	・	-	-	-
	a	e	i	o	u	oo
長音	●	●	●	■	■	■
	a,h	a	e	aw	o	oo

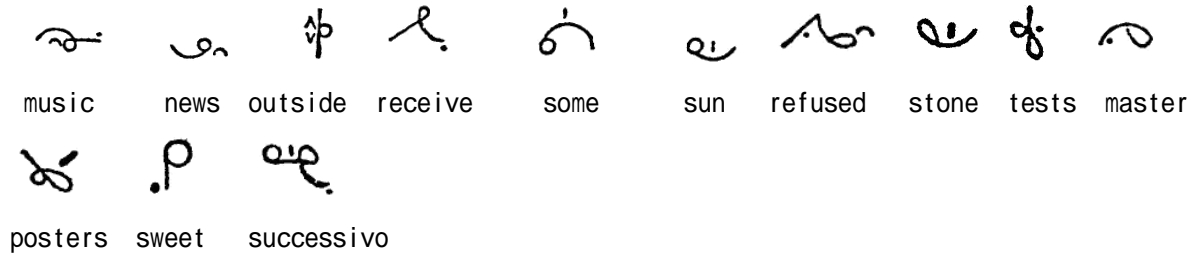
第3図 重母音

ピットマン式では4つの二重母音に符号を当てる。三重母音は二重母音単母音とする。



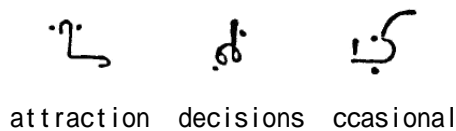
第4図 円、ループ

子音のうちSとZは符号の端を小円に丸める。STとSTSは符号の端を小さなループ状に丸める。大きなループはSTERとSTERSをあらわす。大きな円はSWまたはS'Sを示す。



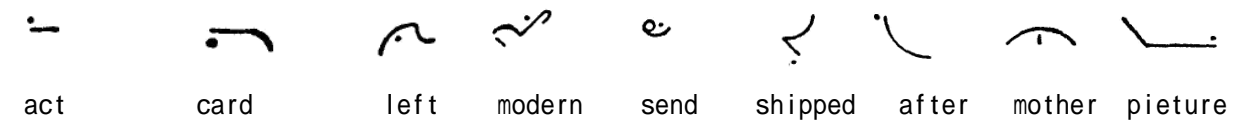
第5図

符号の末端のフックはSAN, TION, ATION, ITIONなどをあらわす。フックの先にLの符号がつくとATIONAL, ITIONALなどを示す。



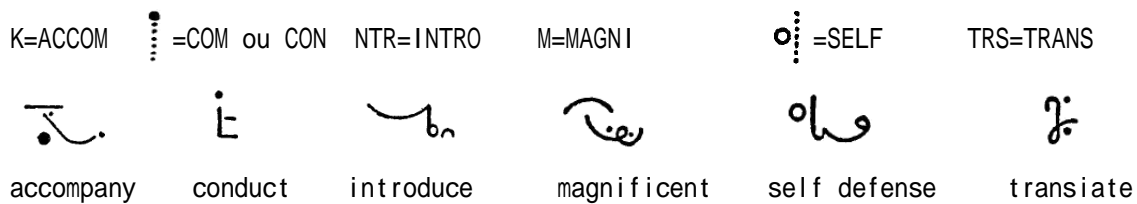
第6図

特定の子音符号を半分にすると、それに続くT・Dを省略できる。逆に2倍にすると、TR, DR, THR, TUREを省略できることになる。



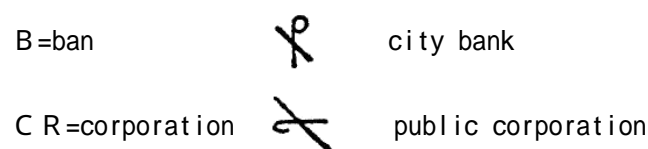
第7図 接頭辞、接尾辞、語尾

接頭辞、接尾辞、語尾は第7図のように一定の符号を略字として当てはめておく。



第8図 常用語

常用語にも略字を定める。



D=department	フ	foreign department
G=government	セ	government office
M=manager	マ	general manager
N=national	キ	national affairs

etc.

第9図 基本語

その他基本語267はそれぞれ略字を持つ。

o	—	—	v	—	—	—	—	—)
as	can	great	I	in	me	pleasure	shall	that	was

第10図 実際例

ピットマン式速記法の実際例の一部である。

Many	say	that	they	find	great	pleasure	in	writing
------	-----	------	------	------	-------	----------	----	---------

ピットマンはその速記法を、用途により3つの段階に分けたいと考えていた。

1. 個人型の速記 数週間の学習で分速50から60語を書けることが目標。そのために単純で書きやすく読みやすい符号にすること。

2. 事務型の速記 ビジネスマンや官吏、学者、文筆家向けに、数ヶ月の学習で分速100語に達し得、あわせて、印刷しやすい符号にすること。

3. 記録型の速記 演説などの連続的発言を記録する速記専門家向けの符号。分速300語が目標。

ピットマン式は今日、創始者の構想どおり3つのスタイルに分化、発展している。

アイザック・ピットマン



アイザック・ピットマンは1813年1月4日、ロンドン西方のウィルトシャー州トロウブリッジに生まれた。織物工場に勤めた後に、18歳のときに師範学校に入学、20歳でバートン・オン・ハンバー・スクールの教員になった。以後11年間、彼は教員としてあちこちの学校に転任する。その間に学んだのがバイロン、テイラー、ハーディングなどの系統の母音省略型速記法であった。殊に彼

はテイラー式を深く研究し、その増補から始め、やがて、符号の一部はテイラーのそれを借用しつつも、全く斬新な速記理論を打ち出すことに成功した。

出版業者のサミュエル・バグスターに励まされ、彼は1837年11月5日に最初の著書 *Stenographic Soundhand* を世に問うた。この本は驚異的売れ行きを見せた。その理由は3つほど考えられる。

- 1．低廉な価格にした。
- 2．積極的な宣伝活動を行った。
- 3．何よりもピットマン式が英語の言語学的特性を十二分に考慮した合理的理論に立脚していることが英国人の信用を博した。

アイザックにとって幸いであったのは、彼の5人の兄弟たちが彼の速記法を広めるため全面的な協力を惜しまなかったことである。1839年から彼は英国内はもとより世界各地で普及活動を開始する。即ち兄のフレデリック、ジョセフ及びヘンリーは英国で、弟のベンとジャコブはそれぞれアメリカ合衆国とオーストラリアでピットマン式の速記学校を経営する。特に、北米に渡ったベンは後出のように大きな成功をおさめた。

1840年、アイザックは第2の著書である *Phonography* を刊行した。これは自分の方式をわかりやすく解説したものである。以後出版される彼の著書はほとんどがベストセラーとなった。*Manual of Phonography, or writing by sound* は100万部近くを売り、*The Phonetic Teacher* は、300万部を突破するといったぐあいである。その単純な構成と学びやすさゆえにヨーロッパで普及したのに比べ、ピットマン式は産業革命後の大英帝国の興隆に伴う英語の普遍化のゆえに世界的な大方式となることができた。

1842年にアイザックはイングランドのバスで、世界最初の速記定期刊行物である *Phonographic Journal* を創刊した。この雑誌は1850年に *Phonetic Journal*、1905年に *Pitmans Journal* と改名され、購読部数は3万部に達した。第二次大戦後は *Pitman's Office Training* と *Pitman's Business Education* として今日も存続している。

1843年、バスで *Phonetic Institute* が設立された。この協会は、前記の定期刊行物を発行することと、ピットマン速記学校の経営、速記教材・速記用具などを目的とした。アイザックの息子のアルフレッドとエルンストは1894年にこの協会を父から引き継いでいる。

1843年3月1日、アイザックの弟子たちは *Phonographic Corresponding Society* を設立した。この協会は後に *Phonetic Society* と改称した。

1847年、アイザックは「速記の歴史」*History of Shorthand* を *Phonotypic Journal* 誌に掲載した。この論文は1884年、*Phonetic Journal* 誌に再び掲載されている。

1881年、英国の諸速記方式の代表を集めて *Shorthand Society* (1893年まで存続) がつくられた。この団体が、たまたまブライト式発表300年、ピットマン式発表

50年に当たるため Golden Jubilee of Phonography と呼ばれる記念すべき年・1887年にロンドンで第1回国際速記会議を主催したのである。9月26日から10月1日まで、英独仏米など11カ国の速記専門家が集まったこの会議には我が国からも東京日々新聞の関直彦が出席した。なお、インテルステノ（国際速記・タイプライティング連盟）は、この会議の後身である。

1890年、アイザック・ピットマンが会長になって、National Phonographic Society が、1894年には National Society of Shorthand Teachers が設立された。その間1890年には速記が成人学校と商業学校の選択科目となっている。

時のヴィクトリア女王は、長年にわたるピットマンの活躍を賞し、1894年、彼をナイトに叙した。サー・アイザック・ピットマンはその3年後の1897年1月23日、多くの弟子や協力者に見守れつつ、バスで85年の生涯を閉じた。

1913年5月、ロンドンとバスで生誕100年祭が盛大に行われ、故人の業績が回顧された。

アイザックの末弟のベンジャミン（愛称ベン）・ピットマン（1822年～1910年）は兄と同じくトロウブリッジに生まれ、バスにつくられた兄の速記学校で教育を受けた。10年ほど同校で助教を勤めてから彼は兄の指事で1853年アメリカ合衆国に渡り、オハイオ州シンシナティーに Phonographic Institute を設立した。ベンが長く会長を務めたこの協会は速記学校と出版社を経営して成功をおさめた。速記の普及に力を尽くす傍らベンはレリーフ彫刻を電気化学的につくる方法を発明（1855年）したり、南北戦争後、シンシナティー術学校で美術と木彫りを講義（1873年～92年）するなど幅広い活躍をした。速記関係の著書は多いが、有名なものとして Sir Isaac Pitman: His Life and Lars（1902年）がある。これは A. Baker の The Life of Sir Isaac Pitman（London 1908）と並んで権威ある伝記である。

ベンの速記方式は、兄のアイザックがみずからの方式に幾度も改良を加えたこともあって、やがて細部においては兄の方式と異なる部分を含むことになった。そのため彼の方式を、いわゆるピットマン式と区別するために「**ベン・ピットマン式**」と呼ぶ。

ピットマンの後継者

ピットマン式は、創始者自身の手で何度も改良を加えられている。また、弟子たちも師の方式を踏まえてそれぞれに改良方式を発表している。主なものは

A・M・ベルの Steno-Phonography（1849年）

F・レドフェルンの Eeography¹（1862年）

D・H・リンズレーの Tachygraphy or Lindsley's phonetic shorthand（1864年）

J・ウィリアムスの Aiethography（1877年）

E・ポックネルの Legible Shorthand（1881年）

また、ピットマン式には次のように各国語に**翻案**されている。

ドリースライン（1884年）ハフト博士（1900年）によってドイツ語に。

パリュエ（1881年）リード（1882年）ローソン（1883年）ブリュース（1886年）ファン・デン・ベルク（1893年）によってフランス語に。

パロディ（1864年）によってスペイン語に。

フランツィーニ（1883年）によってイタリア語に。

デ・ハーンに（1886年）よってオランダ語に。

ガントレット（1899年）によって日本語に。

グレゴリー（1900年）によって中国語に。

シンガウ（1892年）によってベンガル語に。

レジェール（1905年）リンドリッジ（1905年）カトン（1910年）らによってエスペラント語に。

その他、マレー語、ヒンズー語、ペルシャ語、シャム語などにも翻案された。

アメリカ合衆国では、アイザック・ピットマン式に基づいて、エリアス・ロングレー（1879年）アンドリュー・J・グラハム（1854年）ジェームス・E・マンソン（1866年）らの方式が次々に登場した。我が国の**田鎖式はグラハム式**に基づいてつくられた。

出典：向井征二著「速記の歴史 晴洋編」昭和48年3月1日 社団法人日本速記協会発行